

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381330

研究課題名(和文) 乳幼児から学童期の発達障害児の包括的言語・コミュニケーション評価の開発研究

研究課題名(英文) Developmental Research of comprehensive language-communication evaluation for children with developmental disorders

研究代表者

足立 さつき (ADACHI, Satsuki)

慶應義塾大学・経済学部・特任講師(非常勤)

研究者番号：10454307

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：乳幼児から学童期の発達障害児の言語評価をするために統語課題を選定した。平成27年度は、北海道、岩手県、福井県、埼玉県、京都府、熊本県の1歳半～10歳の定型発達児768名を対象に<S-S法>言語発達遅滞検査の受信・発信課題と統語の8課題を実施した。結果、年齢とともに統語課題の成績も上がっていた。統語課題の受信の通過年齢は、貸借文4歳後半、使役文5歳前半、反対語文6歳前半、4語連鎖・授受構文・比較文6歳後半であった。発信の通過年齢は、受信に比し、若干遅れる傾向にあった。課題による通過年齢が段階的であり、言語評価の指標になり得ると考えられる。

研究成果の概要(英文)：We selected syntax tasks to evaluate language of children(from infant to school children) with developmental disorders. In 2015, we assigned 8 syntax tasks and input-output tasks from S-S method to 768 children developed typically in Hokkaido, Iwate, Fukui, Saitama, Kyoto and Kumamoto prefectures.

As result, they got higher scores in syntax tasks with age. The ages they passed the input syntax tasks with were; lending and borrowing sentences - late in 4 years old, causative sentences - early in 5 years old, antonym sentences - early in 6 years old, four-word combination sentences, benefactive sentences and comparative sentences - late in 6 years old. The ages they passed the output syntax tasks with were a little older than the ones of input tasks. These results show that the task passing age is in stages, and it is assumed to be an indicator of language evaluation.

研究分野：特別支援教育

キーワード：発達障害 言語発達 統語能力 発達支援 評価

1. 研究開始当初の背景

発達障害児に対し、発達障害の症状の発現後できるだけ早期に、適切に、就学前の発達支援、学校における発達支援その他の発達支援が行われ、加えて、継続的な相談を行うとされる。また、特別支援教育では、子ども一人一人の教育的ニーズに応じた支援を保障するためには、乳幼児期を含め早期からの教育相談や就学相談を行うことにより、本人・保護者に十分な情報を提供するとともに、幼稚園等において、保護者を含め関係者が教育的ニーズと必要な支援について共通理解を深めることにより可能な限り早期から成人に至るまでの一貫した指導・支援ができるように、子どもの成長記録や指導内容等に関する情報を、その扱いに留意しつつ、必要に応じて関係機関が共有し活用することが必要であると示された。しかし、継続的、個別支援が求められる中、発達障害児の言語・コミュニケーション評価・支援を包括的に行う検査は開発されていない。

2. 研究の目的

発達障害児の評価では、全体発達を捉えた上で、言語面では語彙・統語・会話の評価を行う。臨床場面では、< S - S 法 > 言語発達遅滞検査、絵画語彙発達検査（改訂版）、質問-応答関係検査（短縮版）の3種の検査と行動観察、保護者・関係職種からの情報をもとに総合評価している。< S - S 法 > 言語発達遅滞検査の統語課題は、語順・助詞の2項目だけである。学童期前期の学習を支えるためにも言語理解（統語・意味）を拡大することは必須である。今回、統語課題を検討し、コミュニケーション・言語・認知の3側面を包括的に捉えた< S - S 法 > の概念を軸に、乳幼児から学童期までの包括的言語・コミュニケーション評価の指標を得ることを目的に統語課題を作成することとした。

3. 研究の方法

平成25年度は、統語課題の選定を行った。埼玉県内の保育園児、学童児45名（3歳～10歳）を対象に課題を実施した。8課題を作成し、受信（理解）4～12試行と発信（表出）2試行を行った。

予備調査1：課題試行数の減少と発信の手続きを変更し、3～6歳台の保育園児47名に再度課題を実施した。

平成26年度は、予備調査2：3～6歳台の保育園児125名を対象に行い、最終的な課題を選定し、全国調査の準備を行った。

平成27年度は、全国調査：北海道札幌市、岩手県盛岡市、福井県福井市、埼玉県ふじみ野市、京都府京都市、熊本県熊本市の保育園・幼稚園児および小学生（1歳半～10歳）の768名を対象に課題を実施した。

4. 研究成果

(1) 課題の選定。

統語課題は、以下の8課題とした。

課題	刺激文	試行数
1	・ が公園・店に行く・帰る	4
2	・ が箱・リュックから・に飴・積木を出す・入れる	4
3	押してあげる・もらう	8
4	～が・より大きい・小さい	4
5	貸す・借りる	8
6	追いかける・追いかける	8
7	押す・押させる	8
8	が に をあげる・もらう	8

(2) 統語課題の結果

< S - S 法 > 言語発達遅滞検査の事物名称の発信から開始し、3語連鎖1形式を通過した児に対し、統語の課題を実施した。各課題は、絵図版を示し、発信1試行、受信4または8試行後、見本提示による発信2試行とした。受信課題2試行連続の誤答の場合、その課題は中止とした。受信は、正答1点、誤答0点

とし集計した。発信は、要素を 0~4 点に得点化した。対象の年齢を半年単位で分け、各年齢群の課題の通過率を 60%とした。結果、年齢群の上昇とともに統語課題の成績も上がっていた。統語課題に至らなかった 2 歳児および全課題通過した 9 歳以上の児を除いた 3 歳前半から 8 歳代の各年齢群別の平均正答率を示した (図 1)。

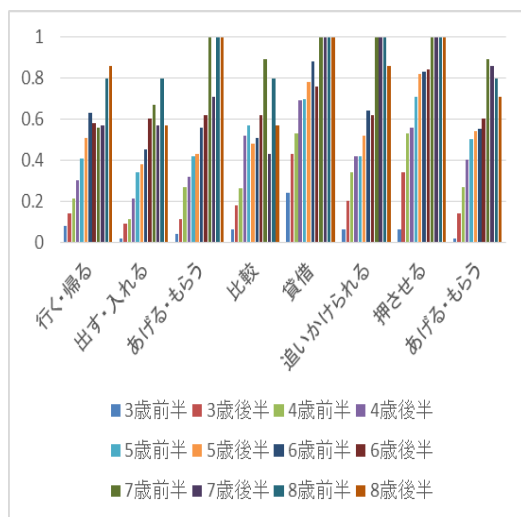


図 1 各課題の年齢群別受信平均正答率

統語課題の受信の通過年齢は、貸借文 4 歳後半、使役文 5 歳前半、反対語文 6 歳前半、4 語連鎖・授受構文・比較文 6 歳後半であった。

発信の通過年齢は、受信に比し、若干遅れる傾向にあった(図 2)。

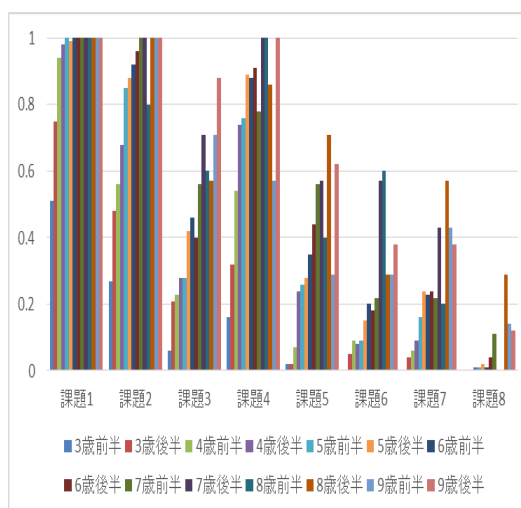


図 2 各課題の発信平均正答率

各課題の受信間および受信・発信間には、弱から中程度の相関が認められた。また、課題 3.5.6.7 の正語順文、逆語順文の平均点の比較では、逆語順文に比し正語順文の方が習得が早い傾向にあった。

課題による通過年齢が段階的であり、言語評価の指標になり得ると考えられる。

(3) 今後の課題

発信については、1 試行目の自発発信と見本提示後の発信では条件が異なるため、質的分析が必要である。

現在、発達障害児についてもデータを収集中である。発達障害児の課題達成についても検討が必要である。

今回の結果を踏まえ、<S-S 法> 言語発達遅滞検査の改定を予定している。

5. 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

Satsuki Adachi, Yasuko Ikeda, Tsuneko Satake, Satoshi Usami, Nobuyuki Sunahara, Masako Notoya, A survey of the development of syntactic comprehension in neurotypical infants, Journal of Tsuruma Health Science Society, 査読有、39 (2) : 51-61、2015

[学会発表](計 4 件)

足立さつき、池田泰子、佐竹恒夫、能登谷晶子、定型発達児における統語の習得順序の検討～予備調査～、第 58 回日本音声言語医学会、2013 年 10 月 17 日、高知市文化プラザ (高知県高知市)

Satsuki Adachi, Ikuyo Fujita, Yasuko Ikeda, Hiromi Harada, Kahoru Hashimoto, Masako Notoya, Relationships between syntactic development in school-age children with pervasive developmental disabilities and their vocabulary/conversation skills, 29th World Congress of the IALP, 2013 年 8 月 26 日 (Torino Italy)

Satsuki Adachi, Ikuyo Fujita, Yasuko Ikeda, Hiromi Harada, Kahoru Hashimoto, Masako Notoya, Language Development in School-aged Children with Pervasive Developmental Disorders: Examining Relationships among Syntactic, Vocabulary, and Speech Abilities, The 5th Pacific Rim Conference of the International Neuropsychological Society, 2015年7月1日、Headquarter Hotel Sydney (オーストラリア)

足立さつき、池田泰子、佐竹恒夫、東川健、東江浩美、能登谷晶子、定型発達児における統語の発達順序の検討、第60回日本音声言語医学会、2015年10月15日、ウイング愛知(愛知県名古屋市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

足立 さつき (ADACHI, Satsuki)
慶應義塾大学・経済学部・特任講師(非常勤)
研究者番号: 10454307

(2) 研究分担者

池田 泰子 (IKEDA, Yasuko)
岩手大学・教育学部・准教授
研究者番号: 90387514

中野 泰志 (NAKANO, Yasushi)
慶應義塾大学・経済学部・教授
研究者番号: 60207850

(3) 連携研究者

(なし)

(4) 研究協力者

佐竹 恒夫 (SATAKE, Tsuneo)
東川 健 (TOHKAWA, Takeshi)
東江 浩美 (AGARIE, Hiromi)
知念 洋美 (CHINEN, Hiromi)
宇佐美 慧 (USAMI, Satoshi)